

太陽 ASG

エグゼクティブ・ニュース

テーマ：中国式教育について

執筆者：ビジネス・ブレイクスルー大学大学院 張 秋華 氏

要 旨 （以下の要旨は1分30秒でお読みいただけます。）

数年前（2011年1月）、中国系のアメリカ・エール大学教授による「タイガー・マザー」というエッセイが発表されたのをご存知の方も多と思います。この中で筆者（Amy Chua 中国名「蔡美児」氏）は自分の娘に「A未満の成績を取る」ことなどを禁じた中国式のスパルタ教育を紹介し、多くのアメリカ人にショックを与えました。また、これとほぼ同時期に OECD が発表した世界の「中学生学力評価プログラム」では、数学、科学、読解力の全3科目で中国・上海が第1位だったのに対し、アメリカは17位から31位と大きく見劣りする結果となりました（日本は3科目とも10位以内）。

今回は、その中国・上海ご出身のビジネス・ブレイクスルー大学大学院・張秋華教授に、中国式教育の特徴点を論じて頂きます。

中国のスパルタ教育は、隋時代の官僚選抜制度「科挙」に由来します。科挙には試験の結果だけで選抜する「公平」さがあり、「万般皆下品、惟有読書高」（世の中の全ては取るに足らないことばかりだが、勉強だけは価値がある）という言葉がある位です。因みに、最近の中国の国家公務員試験の最高倍率は8,709倍（2013年）を記録しました。

タイガー・マザーの記事は多くのアメリカ人には「残忍」なものと映りましたが、一方で中国式の「斬新」さに興味を持つ向きもあり、最終的には「子供の教育の違いでアメリカが中国に越されてしまうのではないか」との国家論にまで議論が膨らんでいます。

この間、中国の一般家庭にとっては今以上に工夫して競争するしかないと考えられており、その延長線上で「早期教育」が流行しています。他方、「厳しい教育」と「将来の幸せ」の相関性に疑問を持ち、せめて子供時代だけでも楽しい思い出を持たせるべきではないか、という考え方も増えてきています。

筆者の考え方はどうかと言えば、小学校時代に上海市から選抜され高校までの寄宿生活で分単位の厳しい毎日を過ごし独立性と精神的な強さが身についた、と中国の教育を評価しています。現在13歳になる長男にも同じような体験をしてほしいとして、幼児のときに上海の実家近くの幼稚園に預け、中学校には優等クラスで入学できました。ただ、中学では国語の宿題が唐詩等の丸暗記などと更に厳しい教育環境になりました。

こうした中で、筆者の家庭では子供の教育を巡り、上海の両親、バンクーバーの兄一家も加わって、国際的な比較の下で議論を重ねてきました。その結果、今年（2014年）早々、兄一家の住むバンクーバーの中学校に転校することになりました。カナダの教育内容は上海より2年くらい遅れているようですが、自由な学習雰囲気の中で伸び伸びと生活しています。こうした経験から、人を鍛える長所を持つ中国式教育を基礎としつつ、自由な精神が育まれるように成長していくのが理想ではないか、と結んでいます。

「太陽 ASG エグゼクティブ・ニュース」バックナンバーはこちらから⇒<http://www.gtjapan.com/library/newsletter/>
本ニュースレターに関するご意見・ご要望をお待ちしております。Tel: 03-5770-8916 e-mail: t-asgMC@gtjapan.com
太陽 ASG グループ マーケティングコミュニケーションズ 担当 藤澤清江

テーマ：中国式教育について

ビジネス・ブレイクスルー大学大学院 教授 張秋華

1. 「タイガー・マザー」エッセイの衝撃

2011年1月8日付け Wall Street Journal (以下、WSJ) の土曜エッセイ欄に、「Why Chinese Mothers Are Superior」というタイトルの文書が掲載された。著者はアメリカの中国系フィリピン人の家庭に生まれ、ハーバード大学ロースクール法務博士号を持つ、エール大学法学部教授の Amy Chua (中国名「蔡美児」) である。エッセイは彼女の新書『Battle Hymn of the Tiger Mother』(「タイガー・マザーの競争賛歌」日本語訳『タイガー・マザー』) の中の一部であり、内容は二人の娘に対する伝統的な中国式スパルタ育児奮闘史であった。彼女の作った「禁じることリスト」が多くのアメリカ人にショックを与えた。

「タイガー・マザー」より禁じられていること

- 友人宅の「お泊り」パーティに参加
- 友達を呼んで遊ぶ
- 学芸会に出演
- 学芸会に出演しないことに関して不平を言う
- テレビを見る、コンピュータ・ゲームをする
- 自分で課外活動を選ぶ
- A 未満の成績を取る
- 体育と演劇以外の全教科で1番にならない
- ピアノとバイオリン以外の楽器を弾く
- ピアノやバイオリンを弾かない

2. 世界の中学生学力評価プログラム結果

同じ時期に、OECD が3年ごとに実施する世界の「中学生学力評価プログラム」PISA (Programme for International Student Assessment) の2009年結果発表があった(2012年結果も添付)。同年の実施対象は世界65カ国と地域の約47万人の学生(15歳)で、実施科目は数学、科学と読解力の3つ、調査結果は、初参加の中国・上海が全ての科目に

2009年PISA評価結果トップ10

数学		科学		読解力	
1	上海 600	1	上海 575	1	上海 556
2	シンガポール 562	2	フィンランド 554	2	韓国 539
3	香港 555	3	香港 549	3	フィンランド 536
4	韓国 546	4	シンガポール 542	4	香港 533
5	台湾 543	5	日本 539	5	シンガポール 526
6	フィンランド 541	6	韓国 538	6	カナダ 524
7	リヒテンシュタイン 536	7	ニュージーランド 532	7	ニュージーランド 521
8	スイス 534	8	カナダ 529	8	日本 520
9	日本 529	9	エストニア 528	9	オーストリア 515
10	カナダ 527	10	オーストリア 527	10	オランダ 508

2012年PISA評価結果トップ10

数学的		科学		読解力	
1	上海 613	1	上海 580	1	上海 570
2	シンガポール 573	2	香港 555	2	香港 545
3	香港 561	3	シンガポール 551	3	シンガポール 542
4	台湾 560	4	日本 547	4	日本 538
5	韓国 554	5	フィンランド 545	5	韓国 536
6	マカオ 538	6	エストニア 541	6	フィンランド 524
7	日本 536	7	韓国 538	7	台湾 523
8	リヒテンシュタイン 535	8	ベトナム 528	7	カナダ 523
9	スイス 531	9	ポーランド 526	7	アイルランド 523
10	オランダ 523	10	リヒテンシュタイン 525	10	ポーランド 518
		10	カナダ 525		

出所: OECD PISA

においてトップの座を取った。これに対し、アメリカは（表には出ていないが）それぞれ第17位、31位、23位の結果であった。因みに、日本は、第9位、5位、8位であった。2012年についても、両国ともほぼ同様の結果となっている。

3. アメリカと中国の反響

この2つの出来事がアメリカにおける子供の教育に関する議論を呼び起した。まずは、「タイガー・マザー」の記事が掲載された1週間の間にWSJに4,000以上のコメントが殺到した。Facebook上での書き込みも100,000件以上あった。多くのアメリカ人にとって、中国式育児法が「残忍」なもので、「あなたは自分が幸せな人間だと思うのか」、「あなたは子供時代の自分が両親と一緒に笑った記憶あるのか」とAmy Chuaを厳しく非難する。一方で、中国式教育の「斬新」さに興味をもち、「20ヵ月の子供にあなたの育児方法を適応したいが、どうすればよいのか」と助言を求める人もいた。また、議論が個別論に留まらず、もし中国式の教育が優れているのであれば、いつか子供の教育の違いでアメリカが中国に越されてしまうのではないかと国家を比較するところまで膨らんだ。

同じ議論は中国においても熱くなった。ただ議論の焦点は違うところにあった。中国人にとって、「タイガー・マザー」の教育方法は個別ルールの設定が違っても基本は正しい。子供が厳しい教育を受けてこそ競争力のある人間になるので、将来幸せを手に入れることが可能になる。従って、子供時代の一時的な犠牲は、長期的な利益を得るための対価であり、仕方がないことである。子供は大人になればこのことを理解するはず、と中国人の両親はこう思う。

4. 中国の教育

一 科挙以来の伝統

確かに、中国は歴史的に見て人材を大切にす国であり、「国以人興、政以才治」（国家は人によって繁栄し、才能によって治まる）の言葉が残っている。中国人も歴史的に見て教育に熱心である。これは隋（581年～618年。魏晋<後述>以降の混乱を鎮め、中国を300年ぶりに統一）の時代から始まって千年以上続いた科挙制度の影響が大きい。魏晋（184年～589年）以降、官僚人事が官僚によって握られ、官僚二世が上位官僚になる現象が蔓延した。これを是正し、官僚組織の中に本当に優秀な人材を入れるため導入したのが科挙制度である。身分を問わず、試験の結果で選抜するとの特徴から、一般平民も試験で優秀な成績を収めれば、官僚になれる。「万般皆下品、惟有讀書高」（世の中の全ては取るに足らないことばかりだが、勉強だけは価値がある）という言葉が、まさに人々にとって勉強が成功できる唯一の道であることを語っている。ただ、勉強をしても試験で勝たなければ意味がなく、試験で勝つことが全てである。実に厳しいものである。

一 近年の国家公務員試験

この厳しい現実は今も昔も変わりはない。近年の国家公務員試験の状況を見れば分かる。中国は約20年前に現在の公務員試験制度をスタートした。公務員の職業は、職業上の安定と近年の給与・福利水準の大幅改善によって人気を呼んでいる。毎年国慶節（10月1日：中国の独立記念日）の連休明けに翌年の公務員募集情報が公表されるが、年々応募者数が増えている。受験条件は、年齢、学歴、専門分野、仕事経験など項目のほか、

一部のポストは共産党員また共青团員に限定する。1次共同科目の筆記試験は11月末に行われ、その成績結果は翌年の初めに出る。1次試験の成績で2次面接と専門科目の受験者が選抜され、さらに同じ手法で次のステップの健康診断まで進む人選を決める。2014年の応募者で受験条件をクリアしたのは152万人近くであった。募集ポスト総数の19,112に対し、平均応募倍率は77倍の狭き門であった。個別ポストの応募倍率で、今回最高倍率となったのは、国家民族事務委員会の研究1課と研究2課のクラーク級ポストであった。応募倍率は6,980倍と5,968倍であった。前年のトップであった国家统计局重慶調査総隊のクラーク級ポストの8,709倍と比べてマシだが、強烈な競争で勝ち取らなければならない点で同じことになる。応募倍率の低いポストを応募しようとする人もいるが、同じことを考える人が山ほどいるため、結局激しい競争になる。実に戦うしかない世界である。また、競争が激しいのは公務員試験だけではない。中国の大学卒業生の就職難問題は年々深刻さが増している。2014年の卒業生は727万人との予測になっており、昨年よりさらに28万人増となる。大都市部ないし一流企業での就職希望者が多い中、実際に希望通り就職できる人数は限られている。公務員試験の受験者が増えているのも、就職できない大学生が増えているのが原因の一つである。



写真：2013年11月24日公務員1次試験日、南京市某試験場

一試験で勝てる教育

このような現実から、中国の学生は、試験で勝てるような教育を望む。また中国の学校も、学生が試験で勝てるような教育と訓練を与えている。PISAの調査結果で上海が1位になったのも、中国の学生が試験で勝てるような日常的訓練を受けている結果であろう。これは上海に限らず、中国各地で同じことが言える。また、内陸部の学生がハングリー精神に満ちていて、上海の学生よりも競争力が高い場合もある。

5. 「タイガー・マザー」に対する議論

一早期教育に力点

「タイガー・マザー」についての話題に戻るが、中国での議論は2つの問題に関心が集まった。一つは、ますます厳しくなる競争環境において、これ以上どうやって勝ち抜けるのか、との問題である。大半の大人は今以上に工夫をして競争するしかない、と考えているが、ただ工夫の仕方は様々である。工夫の仕方として、子供の特徴を活かした専門教育（音楽、スポーツなど）を選ぶものもあれば、海外留学をさせるような一般中国人にとってかなり高価な教育費を払ってまで特別な教育を行うものもある。近年、各国における中国人留学生数は年々増えており、留学生の低齢化も進んでいる。これらの

他の方法で、最も多くの大人が支持しているのは、より早い時期から子供に教育を与えること、である。またこれを背景に、「早期教育」が近年中国で大流行りするようになっている。

「早期教育」とは、文字通り早い時期から子供に教育を与えることである。教育手法によっては子供が生まれる前から胎教を通じてスタートする。直近の統計ではないが、ある民間教育研究所が行った調査で、2011年の上期時点で、中国には既に12,450以上の早期教育機関が存在した。中国本土の会社に加え、外資系企業による展開は全体の約2割を占めた。北京、上海、広州、深圳（「しんせん」。香港の近隣）などの都市部では、世界中から来ている子供向け教育ブランドを目にする。イタリアの「Montessori」、米国の「Gymboree」、「MyGym」、日本の「七田式」などがその中に含まれる。早期教育手法は色々あり、音楽系、スポーツ系、絵画系など遊びながら学ぶものもあれば、フラッシュカードなどを使っての右脳開発、また英語力、ロジカルな思考力、人前でのプレゼン力を養成するものもある。早期教育のキャッチフレーズは、「子供がスタートラインに立つ時点で遅れを取ることのないように」となっている。

ー子供時代を楽しく

2つ目の問題は、これまで正の比例関係にあると思われていた「厳しい教育」と「将来の幸せ」（幸せの定義は兎も角）の関連性が疑問視されることである。つまり、将来の幸せを得るために子供時代の楽しみを犠牲にしているのに、後になってみると、両方を失っていることである。こういうことであれば、せめて子供時代だけでも楽しい思いをさせるべきではないか、という考えが増えている。また、子供の代わりに大人が頑張っていて、子供に一生困らないような財産を作ってあげれば良いと考える大人も少なくない。まさに各家庭の個別事情で考え方が様々である。

6. 我が家の教育

ー大家族で話合う伝統

我が家の例でいうと、他の中国家庭と同様に、子供の教育について常に話し合っている。対象となっているのは、今年13歳になっている私の長男である。ここでいう我が家は、私の両親、私の兄一家も加えている。中国では、子供の教育について大家族で話し合うのが一般的であり、我が家の場合は、上海にいる両親とバンクーバーにいる兄一家も議論に加わるので、いわゆる日本、中国、カナダに渡る国際的な議論になる。各地の教育方法とインフラを比較しながら、長男に合った最適な教育を考えるのである。

私の両親は、二人とも共産党員であり、いろいろな意味で子供の教育に厳しい。視野を広くすると同時にプラグマティックになることが子供教育において大事、と主張する。また、兄一家も「タイガー・マザー」に近い教育方針である。一人っ子の息子の教育のため、遥々（はるばる）とカナダに移住したうえ、高校2年から全ての科目でAを取るように要求する。1科目だけBを取った息子に対し、兄が厳しく原因を追及したのが記憶に残る。

ー私の経験

私が長男に期待しているのは、早く独立精神を持つような人間になることである。それは私自身の子供時代の体験に原因があると思う。私は9歳になった年に当時の上海市から選抜され、両親のもとを離れてある寄宿学校に入った。あれから高校まで続いた寮生活の毎日はいまでも昨日のここのように覚えている。毎日の始まりは朝6時の起床べ

ルで、6時20分までに全員がグラウンドに着き、体操して朝走りをするのである。ベルが鳴ってから約17分で、服を着て靴を履き、布団を四方形に畳み、シーツを整え、洗顔、歯磨きを終えなければならなかった。大人にとっては簡単かもしれないが、9歳の私たちにとって至難な業であった。万が一ボタンの掛け違いがあったら、やり直しているうちに遅刻をしてしまうような緊張感が常にあった。一番の時間のロスは、洗面コーナーでの順番待ちであった。一つの蛇口を5、6人でシェアしなければならないので、早い者勝ちで遅い人は待つしかなかった。誰もがそれで数回かは遅刻するが、失敗をすれば知恵がつくもので、いつの間にか皆前日の夜に歯磨き用コップと洗顔ボールに水を入れ、ベッドの下に置くようにした。私は歯ブラシに歯磨き粉を付けておくようにまでしていた、のである。今になって思えば、あの厳しい寄宿生活が私に早くから独立性をもたらし、強くしてくれた。のちになって北京での大学生活も、日本での留学も、他人が思うほどの大変さを感じなかったのもこのお蔭である。長男にも同じような体験をしてほしいのである。

一長男の教育

実は長男もそういう意味で、早くから私のもとから離れ、上海で教育を受けることになった。彼が1歳半になったころ、会社復帰して育児と仕事の両立で闘いにくたびれていた私が上海の両親と話し合った結果、息子を上海実家の近くにできた外資系「双語幼稚園」（中国語と英語）に入園させることにした。外資系幼稚園は中国改革開放後に認められたもので、公立の幼稚園が4歳児からしか受け入れないのに対し、1歳半の子供から受け入れてくれる。先生も大学で英語を専攻し、トレーニングを受けた優秀な若い男女が殆どで、送り迎えも専用バスがあるので、安心して預けることができることであった。

その後、長男は上海の小学校に入るが、質の高い小学校に入れるためその学校の学区内でマンションを買うことにした。隣人には中国内陸部から出てきて、上海でビジネスを成功している人が少なくなかった。彼らは上海で不動産を買う目的の一つは、子供を上海の学校に入学させることである。小学校に入った長男は、いきなり激しい競争に曝（さら）されたのである。全ての生徒が学校ルールの遵守状況が記録され、よく出来ると星マークをもらえる。クラス全員の星マークの数を書いた表が壁に貼られ、長男の星マークの数はトップの半分にも届かなかった。試験の結果も全て公表される。月末、期中、期末など比較的重要な試験は、学生本人の成績と同時に、クラスにおける順位、学年における順位を何人中の第何位で明示される。毎回の採点后試験用紙に両親が署名し、コメントの記入が必要な場合もある。学生は常に自分の順位を意識し、両親も大きなプレッシャーを受ける。

中学校に入ると、クラス編成は優劣を区別して行っている。中学校は小学校の持ち上がりなので、小学校での成績によって学生が入るクラスが決まる。長男の場合は幸運にも3つの優等クラス（全10クラス）のうちの1つに入った。このクラスの特別授業として、フランス語を第二外国語で教える。私も子供の時からフランス語を習ったので、息子が子供向けシャンソンを練習しているのを聞いて、思わず一緒になって歌ってしまうこともあった。しかし、中学校の宿題は小学校よりさらに多くなり、真夜中までやらないと終わらないことも珍しくなかった。徐々に、ピアノレッスンなど趣味関連の時間を削り、学校の勉強に集中しなければならなくなった。数学、英語の宿題は別として、国語の宿題は唐詩、宋詞（俳句に類似）、現代文の丸暗記に加え、2日おきに作文をしなければならないのであった。息子はこれ以上書けるテーマがないと何度も苦言を漏らし、国語の授業を嫌うようになった。幸い私がオンライン書店で人気作文集を見つけて、

長男に2冊を買ってあげた。2冊合わせて2,500の作文の入った1,000ページ以上の内容ではあったが、長男は頑張っほぼ全作文内容を覚えるようにした。あれから試験でどんな作文テーマが出てても対応に困らなかった、と長男は言った。

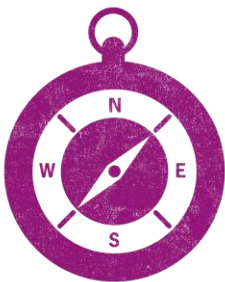
ーカナダの中学への転校と長男への期待

先月は長男にとって最も幸せな出来事があった。上海の中学校からバンクーバーの中学校に転校することになった。これは我が家全員が1年以上議論して決めたことであった。一旦実行したら、逆戻りは基本的に考えられない。というのは、英語以外の科目で、上海の中・高校で教えている内容はカナダの学校より2年くらい進んでいると思われる。ただ、学校での科目勉強がすべてだと考えていない。我が家の大人たちが願っているのは、長男が上海で鍛えられたものを基礎にして、バンクーバーの自由に満ちた学習雰囲気なかで、創造力を高めながら伸び伸びと成長することである。長男にはどれほど私たちの願いを理解しているのかが微妙だが、毎朝楽しそうに家を出て学校に向かっていることだけは確認できている。

7. まとめ

中国の競争を中心とした教育は、人を鍛える面での長所を持っているが、青年期を競争“だけ”で過ごすのはやはり問題がある、と考えている。長男に対し伸び伸びとした教育を行うカナダに転校させたことでも分かるとおり、競争で鍛えられたものを基礎としつつ、自由な精神が育くまれるように成長して行く、のが子供教育の理想ではなかろうか。

以 上





執筆者紹介

張 秋華 (Jenny Chang) 中国上海生まれ
ビジネス・ブレイクスルー大学大学院 教授

<学歴・職歴>

大阪大学経済学部卒業

豪州ボンド大学経営学修士 (MBA)

2002年から2009年 HSBCグループ香港上海銀行 中国業務推進室 室長

2008年4月 ビジネス・ブレイクスルー大学大学院 教授

<専門分野等>

事業法人・金融法人向け中国ビジネスに関する金融・財務アドバイス。

クロスボーダーの資金移動及び中国国内での資金調達、為替リスクヘッジ等。

母国語中国語と上海語の他、英語、日本語、フランス語に堪能。